

トビウオ通信 (H21 第5号)

<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《平成21年度第1回日本海スルメイカ漁況予報》

平成21年4月28日に独立行政法人水産総合研究センター日本海区水産研究所より第1回日本海スルメイカ長期漁海況予報が発表されました。今回はその内容を基に、島根県沖のスルメイカの今後の漁模様の検討をします。

今後の見通し (予報期間5~7月)

日本海全域 (日本海区水産研究所発表)

- (1) 来遊量: 近年平均並み
- (2) 漁期・漁場: 昨年より早く、近年平均並み。
- (3) 魚体の大きさ: 昨年より大きく、近年平均並み。

島根県沖

来遊量は少なく、漁況は低調に推移する。

※ 近年: 過去5年間 (H16~H20年)

日本海におけるスルメイカ資源の動向

幼生の分布量の調査結果

日本海では5月下旬~10月に前年の秋~冬に生まれたスルメイカが主に漁獲されます。したがって、前年秋~冬のスルメイカ幼生の分布量は日本海へのスルメイカの来遊量を予測する資料となります。昨年の秋に日本海西部から九州西岸海域において日本海区水産研究所および各県



図1 スルメイカの孵化幼生 (外套背長約1mm)

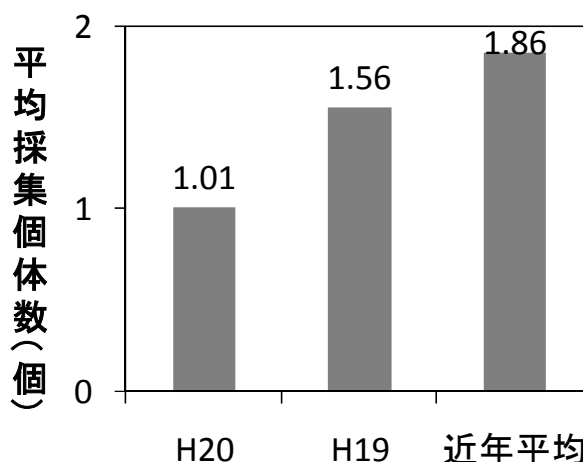


図2 日本海西部~九州西岸海域でのプランクトンネットによる1調査点あたりのスルメイカ幼生の平均採集個体数 (近年平均はH15-19年の平均値) ※日本海区水産研究所提供

の関係機関によりスルメイカの幼生（図1）の分布量調査が実施されました。その平均採集個体数（1.01 個体）は前年（1.56 個体）・近年平均（1.86 個体）を下回りました（図2）。このことから日本海西部における昨年の秋のスルメイカの発生量は、前年・近年より低い水準と考えられます。

加入前のイカの分布量の調査結果

イカ釣り漁業では体長（外套背長）が約15 cm以上の大きさのスルメイカが漁獲対象となります。したがって、漁獲対象となる前の大きさのスルメイカ（主に外套背長2 cm～10 cm）の分布量は漁期前に漁況を予測する資料となります。今年も4月に日本海沖合海域において、表層トロール網を用いた漁獲加入前のスルメイカの分布量調査が日本海区水産研究所や関係各県により実施されました。その結果、採集されたスルメイカの1調査点あたりの平均採集個体数は81.3 個体となり、近年平均（32.5 個体）・前年（35.0 個体）を上回りました（図3）。

ただし、今年採集された個体には予報期間に漁獲加入する体長5 cm以上の個体の割合が少なく、その採集個体数（17.7 個体）は近年平均（15.3 個体）並みでした。この結果と幼生の分布量などから、日本海全域における今期のスルメイカの来遊量は近年平均並みと考えられます。

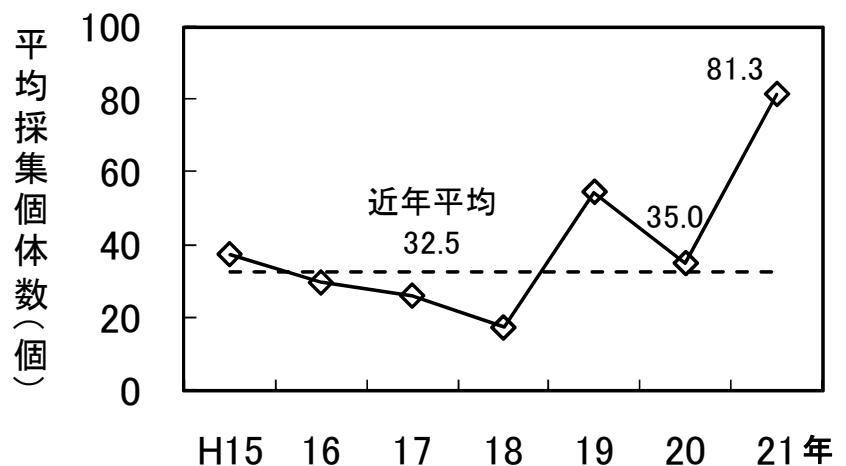


図3. 日本海の沖合において表層トロール網により採集された漁獲加入前のスルメイカの平均採集数の推移（実施時期：4月） ※日本海区水産研究所提供

今後の島根県沖での漁況

スルメイカは低調

主要3港（浜田、恵曇、西郷）における小型イカ釣（5トン以上30トン未満）によるスルメイカの月別の水揚動向を図4に示しました。平成21年の4月までの水揚量は231トンで、近年比では16%、前年比では17%に留まりました。今年は当初から韓国東岸の海水温が高めで経過し、か

つ、対馬暖流の沖合域の流れが強かったため、島根県沿岸域へのスルメイカの来遊量が少なく島根県内への水揚状況は極めて低調に推移したと考えられます。

日本海全域における今後（5月～7月）のスルメイカの来遊量は近年平均並みと予測されていますが、今後（4月～6月）の対馬暖流の水温は表面及び水深 50m と

も「平年よりやや高め」で経過すると予測されている（詳しくはトビウオ通信 H21 第3号をご覧ください）ことから、スルメイカの北上時期が早まり、島根県沖への来遊（漁場形成）は短期間に留まると考えられます。したがって、島根県沖での今期のスルメイカ漁況はあまり期待できないと言えそうです。

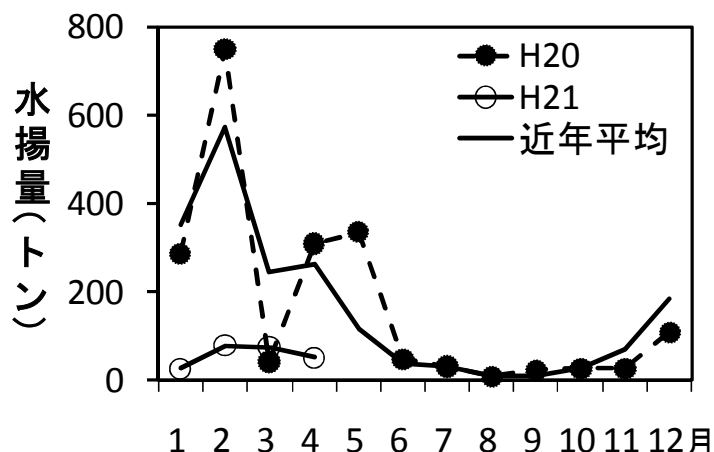


図4. 主要3港（浜田、恵曇、西郷）におけるスルメイカの水揚動向